

大平賞受賞 中西嘉宏研究員にきく 軍政ビルマの権力構造



中西嘉宏研究員の著作
『軍政ビルマの権力構造—ネー・ウィン体制下の国家と軍隊1962-1988』
(京都大学学術出版会) が
第26回大平正芳記念賞 (財団法人大平正芳記念財団主催) を受賞した
中西研究員に多岐にわたりお話を伺った

——このたびは、第二六回大平正芳記念賞の受賞おめでとうございます。まず受賞の感想をお聞かせください。

受賞の知らせを受けたときは、本当に自分が受賞しているのか、と思いました。歴代の受賞者が名だたる先生ばかりで。

例えば第一回の受賞者は土屋健治先生です。僕が東南アジア研究に関心を持つきっかけになった本のひとつが土屋先生の『カルティニの風景』という本でした。その土屋先生と同じ賞を頂くということとは、光栄に思う反面、荷が重いなと不安な気持ちになりました。

——ビルマ(ミャンマー)というと他の東南アジアの国々と異なり、国を閉ざし、内情もわからない国というイメージが私にはあります。中西さんの場合、ビルマを、それも現代や植民地期、独立時ではなく、その中間のネー・ウィンの軍政時代を対象とした理由は？

確かにビルマに関する情報はものすごく少ないですね。タイだとネットで読める官報でさえ、ビルマで読むには手間がかかります。他方で、軍事政権に対する批判的な情報はたくさんあります。僕の調査には、この情報と批判と間のギャップを埋めようという目論見がありました。ですので、最初は、

歴史ではなく現代政治を研究したかったんです。

ところが、ビルマの研究をしている人に聞けば聞くほど現代政治の研究は難しいということがわかりました。政治に関する情報が、無味乾燥な政府発表や根拠の怪しい噂ばかりで、かといって、政治に関わっている人に会いに行くとなると当局に目をつけられてしまうからです。

現地での本格的な調査なしで拙著のもとになる博士論文は書けないと判断して、時代を少し遡ることにしました。独立直後の時期や日本の軍政時代も対象としてはあり得たのですが、僕自身の関心は現代の軍政とのつながりにあったので、一九六二年〜八八年という最初の軍政時代にしました。この時代にかかなり大きな変化があったはずなのに何が起っていたのか不明な点が多いんです。

——当時の政権にいた方々にインタビューされて写真なども撮っていたのでしょうか。

現地の所属機関を通して調査許可をとっていましたが、問題はありませんでした。インタビュウは警戒して会ってくれない人もいましたが、資料調査の点では幸運に恵まれて予想以上の資料を集め

ることができましたね。文書館や図書館に所蔵されていない資料は時間がたつほど散逸してしまいうすし、かつての有力者たちもすでに亡くなられたか、ご高齢の方が多かったです。調査を急がないと、ネー・ウィン体制期が暗黒時代になってしまふという焦りがありました。これは自分の研究にとっても危機ですが、それ以上にビルマの政治史を考える上でも危機だという認識がありました。

——ビルマ語の資料を読んだり、ビルマ語でインタビュウもされたそうですね。東南アジアの言葉は難しいと思いますがどうやってあの視力検査の記号のような文字を習得されたんですか。

最初の八カ月は語学だけで調査は何もしませんでした。二人家庭教師を雇って一人は週三日、もう一人は週二日で平日は毎日、午前中二、三時間授業を受けて、午後には復習するということを続けました。僕は、語学のセンスがないので真剣にやらないとまずいと思い、本当に集中的にやって覚えめました。今もそれほど上手だとは思っていませんが、なんとか調査で使えるほどにはなりました。言葉覚えられないと論文も書けないし、就職もできないという、今となっては必ずしもそんなこと

軍政ビルマの 権力構造

ネー・ウィン体制下の国家と軍隊 1962-1988

中西 嘉宏著



はないのですが、変な緊張感もありましたね。

——ビルマ語を使えたということがインタビュする上で有利に働いたとも言えるようですね。

そうですね。通訳を通すとどうしてもコミュニケーションがスムーズにいかないところが出てくると思いますが、あと、僕が現地で行ったのは調査票にもとづくようなインタビュではなく、話の流れを相手に合わせてつくっていくようなものでした。人や話題によつてはまったくメモ

をとらないこともありましたが、その方が相手が話しやすいと考えてのことです。逆にメモをとった方がノッてくる人もいました。そこら辺は感覚で臨機応変に対応するところなんでしょうね。僕もまだうまくできません。インタビュの技術はもっともつと向上させる必要があります。

——ビルマという国は私から見ると特殊な国のように見えます。軍政が何十年も続いていてなかなか民主化されません。他の東南アジアの国々とのように比較できるのでしょうか。

政治的に言うと、軍政はタイやインドネシアにもあったのですが、重要なポストに就く軍人の数が全く異なります。ビルマほど軍人が政権内にいる、というか軍人しかいないというような国は東南アジアの他の国にはありません。タイもインドネシアも時が経つにつれて軍人の存在感は薄まってきました。それに代わって、官僚や実業家や独裁者の親族だとか、存在感を増していくのですが、ビルマはそうはなりません。なぜなのか。これが拙著の問題関心のひとつです。

——ビルマ式社会主義という言葉があります。ネー・ウィンはビルマ式社会主義を標榜したようですが、

いったいビルマ式社会主義とは何だったのでしょうか。

社会の経済的不平等を生産様式と所有の変化によって解消しようとする試みが一般的な社会主義の目的であるとすれば、「ビルマ式社会主義」も例外ではありません。そこには革命によって既存の政治経済秩序を変え、真の平等で公正な社会を実現しようといった「夢」はあったように思います。

問題は、「ビルマ式」がいったい何を意味するのかというところでしょう。従来の議論は、「ビルマ式」に、ナショナリズムと仏教思想の影響を読み取ってきました。というのも、当時の公式イデオロギーからはビルマの独自性へのこだわりが感じられ、また、仏教の教典のひとつである論蔵の用語がちりばめられていたからです。

拙著では、この議論に修正の必要性があると主張しました。これまでの議論はこの公式イデオロギーが誰によつていつどこで起草されたのかという観点が欠けていました。そこで、起草者を特定し、その人物の思想形成をあとづけるとともに、彼が国軍のなかでどういった地位にいて、軍内政治にどのように巻き込まれていたのかを検討しました。

——起草者の方に直接お会いになったんですか。

はい。幸い、起草者のチツ・フラインさんはご存命で、三回ほど話を聞く機会に恵まれました。話を聞くと、彼は元共産党員で、独立後にフランスに留学し、その後、国軍の軍属として反共産党宣伝工作に従事した人物でした。公式イデオロギーの原案となった論考も、反共産主義の雑誌記事として書かれています。反共産主義のために書いた論考が、のちに「ビルマ式社会主義」の公式イデオロギーになったわけですね。なぜ、どのようにしてそうなったのか。それを軍内政治から説明したのが拙著の第二章です。完全には解明できませんでしたが、これまでの研究では議論されていない点を明らかにできたと思います。

——仏教は現世で徳を積んで来生に救いを求めるといわれています。そのため、ビルマの国民は飢えることなくそれなりに暮らしていければ今の政権でも我慢しようという気持ちになるという説明があります。こういう宗教的な背景で政治的な変革も起こらないという解釈に対してはどうお考えですか。

拙著のなかでは、こういう説明を文化論的な説明と名付けています。学術書でもそういった説明を

問題になるでしょう。文化論的な視点を忘れるべきではないとは思いますが、今のところは、実態の観察を欠いた議論になりがちだと思っています。今後の研究の発展が望まれるところですね。

―御著書の中には、そうした国民あるいは市井の人々はあまりでてきませんね。

僕が拙著で言いたかったことのひとつは、社会が政府に抵抗してはじめて政治が変わるという政治変革のイメージにビルマ政治研究がとらわれすぎているのではないかということです。もちろん、心情的にはわかりますし、大規模な社会運動が各国で政治の民主化を実現してきた事実もあります。ただ、中国やベトナムを見るとわかるように、国家が自己変革することで社会の変化や国際的な変化に対応するというパターンもあります。

ただ、こうした主張は、かなり慎重に行わなければ、根拠のない運命論か、歴史のあとづけになってしまうと思います。例えば、一九八八年や二〇〇七年に起きた大規模な反政府運動をどう説明するのか、であるとか、タイやカンボジア、ラオス、スリランカといったその他の上座部仏教国の政治的变化をどう説明するのか、といった点が

のか、その存続メカニズムは何かを国家内部の論理から明らかにすることでした。

―国家内部の論理を明らかにするために、御著書には国軍の人事データが大量に使われていますね。

きっかけは、大学院一年生のときにヤンゴンで、東京大学の高橋昭雄教授から古書店で見つけたと譲り受けた、一九七一年の党中央委員候補者の経歴集です。ぼろぼろの資料でしたが、当時の有力者三〇〇名の経歴がファイルされていました。直感的に「これで何か書けるのでは」と思いました。その後、三年くらいかけて集められるだけ党の中央委員候補者の経歴集と議会の議員の経歴集を収集しました。

結局、のべ一三八九人の議員のべ一八八九人の党中央委員候補者のべ三一九人の地方党幹部のデータを収集できました。また、国軍については、国軍の文書館で一九七二年から一九八七年までの辞令集を発見したので、そのうち佐官級将校以上の異動の記録を筆写しました。来る日も来る日も異動の記録を筆写する日々は、今となってはよい思い出なのですが、当時は結構つらかったですね。作業の大変さよりも、正直なところ、

こうしたデータから何が言えるのか、まだよくわからないままの作業でしたから、精神的な不安が大きかったように思います。

最終的には、収集したデータから様々な発見がありました。例えば、拙著の第六章で指摘したことですが、国軍におけるいわゆる出世コースの狭さです。作戦将校で大隊長から軍管区司令官まで昇進していく経路があつて、それを踏み外すともう軍外の「天下り」ポスト行きが見えてきます。この出世コースの狭さが国軍将校たちの保守的な政治姿勢につながっているのではないかと推測しました。

―軍政が維持されている理由には外なる敵というよりも内部的に抱える少数民族の反乱や独立を抑えるという要因もあるんですか。

ありますね。いや、ありましたね、というのが正しい答えかもしれません。一九六二年三月二日のクーデターは国家分裂の危機を予防することがひとつの理由でした。それから四八年、まだ一部に有力な反政府少数民族勢力がありますが、クーデター当時と比べると、遙かに政府が直接統治できる領域は広がっています。現在は二〇〇八年憲法のもと、停戦合意を結んだ反政府武装勢力の国境警備隊への組み込みが進んでいるとこ

るです。

です。軍政が、自分たちが政権を維持していることで少数民族の反乱が抑えられていると言っても素直に肯くことはできません。現在の問題は、より日常的な宗教的、民族的差別ではないかと考えています。例えば、少数民族や少数宗教者は公務員になっても昇進が遅いであるとか、仏塔が日々新しくなるのに対して、教会やモスクの新築、改築には政府の許可が下りにくいであるとか、そういった問題です。武力紛争のレベルだけでなく、より日常的な差別にも注意を払わなければなりません。将来的な民族紛争、宗教紛争の火種になりかねないからです。

——いまの軍政が未来永劫続いていくと言うことは考えづらいように見えます。しかし、現在からどのように民主化が起きるのかはイメージしにくいです。今後、ビルマはどのような民主主義にいきつくのでしょうか。あるいはいきつかないのでしょうか。

軍政がどこまで持続可能なのかについては議論があるところで。僕自身は、少なくとも現在のような、天然ガス輸出による比較の潤沢な財政と、国軍将校団に對抗する政治勢力がほとんどいない政治構造を見る限り、そう簡単に

は軍政は倒れないと思います。

アウンサンスーチーさんも国民の支持者は多く、西欧諸国も彼女の動向には常に注目しています。が、彼女を中心とする組織的な力は一九八八年から着実に軍政によつて骨抜きにされてきました。

ですので、すぐに民主化が起こると想定することは難しいと思います。今のビルマ政治は一元的な政治構造から限定的な多元的政治を実現する段階にあります。国軍将校たちがほぼ独占してきた政治過程に、それ以外のどのような人たちが参加するのか、それが十一月七日に予定されている総選挙で注目すべき点ではないでしょうか。

——選挙の話が出ましたが、二〇年ぶりに行われる総選挙では、軍政寄りの政党が体制をしめるという予測ですね。

そうなると思います。軍政寄りの政党は、具体的には連邦団結発展党(USDA)です。この政党が過半数をとることは間違いないでしょう。それに国軍司令官が指名する両院四分の一の議席を合わせて、少なくとも四分の三近くを親軍政勢力がとるものと予想されます。

ですので、総選挙がいわゆる民主化を意味するということはないでしょうね。ただ、だからといって

て無意味だと判断するわけにはいきません。残りの四分の一にどういった勢力が入るのか、今後、選挙を重ねるなかで、彼らは政党として組織的な発展を遂げ、勢力を拡大していけるのか。そうした長期的な視点のなかで総選挙を見る必要があるように思います。

——現在参加されている研究会は、やはりビルマの軍政に関するものですね。

今年の総選挙後を展望するために、一九八八年から現在まで、教育、宗教、軍隊、外交、少数民族などの分野でどのような変化があったのかを総括するという目的で立ち上がった「ミヤンマー軍事政権の行方」という研究会です。成果は「アジア研選書」として出版する予定です。アジア研のビルマ研究者に加えてビルマをよく理解している外部の専門家にも参加していただいております。ビルマについて類書のない本になると思います。うまくいけば来年には刊行できるはずです。

——御著書の続編はどういったものになるのでしょうか。

ビルマ政治に関する調査は年々厳しくなっています。僕がかつて行った歴史に関する調査ですら現

在はできません。どうすれば調査が可能で意義のある研究ができるだろうかいつも考えているところです。

次のテーマを考えるのと並行して、とりあえず拙著を英訳したいと思っています。語学能力の問題で、まずは日本語で出しましたが、やはり国際的なアジア研究に貢献したいという思いは常にあります。ビルマは情報が極端に少ない国ですから、拙著の学術的な価値は決して低くないと信じていますし、多くの方から批判、コメントを受けることで、次の研究の糧にしたいですね。

——どうも長時間ありがとうございました。



2007年8月インタビュー調査時の筆者(左)